

教育学におけるレトリックの復権とは？

ーレトリック的論証 (Argumentation) による

教育学の基礎づけについてー

瀬戸口 昌 也

はじめに

レトリックと教育は、西洋では古代ギリシャ・ローマ時代から密接な関係を維持してきた¹。イソクラテスの修辞学校や、キケロやクインティリアヌスの著作に代表されるように、レトリックは古典古代から教育の内容とされ、西洋における教育理念を形成してきたのである。その一方でレトリックは、アリストテレス以来体系化と細分化が進み、中世のリベラル・アーツの中に組織化され、学校教育の中に浸透していくにつれ、形式化・形骸化の道をたどることになった。近代以降、デカルトに代表される合理主義に対して、レトリックの学問的効用を説くヴィーコの功績はあっても、レトリックに対する教育的関心は減少し、18世紀の初めにはレトリックは「一時的な終焉」を迎えることになった。19世紀には、学校でのレトリック教育は「時代遅れの骨董」として消失するか、母国語教育の一部としてのみ継承されるという状況になった。

しかしこの状況は、20世紀になって一変する。レトリックが再び注目をあびるようになり、その「復権と革新」が唱えられるようになったのである。特徴的なことは、この復権がレトリック本来の領域からではなく、それに隣接する学問領域一言語学や哲学、心理学、解釈学、意味論、記号論、美学、認知科学など一からの多様なアプローチによって成し遂げられたということである。教育学の領域においても、レトリックについて新たな問題関心が呼び起こされた。ドイツ教育学に限ってみても、教育学が言語の問題へと関心を向け始めた1950年代以降、隠喩が教育学に果たす役割についての研究が盛んになる。これらの研究は、隠喩や言語が持つイメージ (Bild) が、教育現実の認識や教育学の概念形成に果たす役割、または教授に果たす機能を明らかにしたが²、これらの研究に加えて、1990年代以降特に注目されてきているのが、論証を中心とした研究である。この分野の代表者としてヘルマーやデアピングハウス、アーペル、コッホなどが挙げられるが、彼らの精力的な研究活動は、「教育学における論証の理論」をテーマとする会議の連続的開催や、その報告を兼ねた論文集の一連の出版等で知ることができる³。彼らに共通しているのは、古典的レトリックにおける論証を、ポストモダンの哲学の成果をも取り入れながら、教育学の観点から新たに捉え直そうとする態度である。こうして例えば「語り手の陶冶の問題」や、「知識の秩序づけ及び論拠の定式化のためのトポス論の役割」、「説得推論 (en-

thymema) による推論形式]、「論証にとっての情動の意味」、「レトリックに方向づけられた教授法」などが、教育学的観点から新たに見直されることになる。そしてまた、隠喩や言語のイメージも、それが教育を論ずる際の叙述形式として用いられる限り、論証との関係において考察の対象とされる。このような多様な研究内容を持ちながら、そこで目指されるものは、「学問としての教育学を、レトリック的に新たに基礎づけること」⁴であるとされる。

このように見えてくると、ドイツ教育学におけるレトリックの復権は、まず隠喩の研究から始まり、その後論証についての研究が加わってきたと言えるだろう。このような経過は、60年代にドイツ教育学の主流の一つであった解釈学的教育学が、隠喩の教育学的考察を行う土台と成り得たこと、しかし90年代以降教育学理論が多様化し、諸理論間での「意思疎通」の可能性が問題となってきた事情⁵と無関係ではないように思われる。すなわちレトリックの論証が、意思疎通の手段として注目されるようになってきたのである。また日本ではレトリックは、教育の分野では主として国語教育の領域で論証（討議法）を中心にその効果が見直されてきたが、最近になって、教育学とレトリックとの関係についての学問的研究が見られるようになった。中井孝章氏の「議論と対話の論理」についての研究は論証についての研究であり、鈴木晶子氏の「教育詩学」の新しい試みは、教育のテキストを、修辞学の観点から読み解く試みと見なすことができる⁶。

教育学におけるレトリックの復権は、隠喩の研究から論証の研究へと進むにつれて、現代の多様化した教育学理論の状況下で、意思疎通のための論証という手段で、新しい基礎づけの可能性を模索している状況を反映しているものと言えよう。ヘルマーやデアピングハウスの研究は、その意味で注目されるべきものである。しかし彼らの言う論証や隠喩の捉え方については、解釈学的教育学の立場から疑問が残ることも事実である。この疑問を解明し、レトリックによる教育学の基礎づけの可能性を探るために、デアピングハウスの近著『レトリックの論理』⁷をとり上げることにする。この書は彼の教授資格論文であり、レトリックの論証に基礎づけられた教育学の構想の詳細を知るのに適している。

I. デアピングハウスのレトリック論

デアピングハウスはレトリックを、「交渉（Verhandlung）途上にある対象を解明するために、誠実な仕方でも努力する論証の理論」（LR12）であるとしている。レトリックのこのような捉え方は、レトリックを「どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力」として体系化した、アリストテレスの『弁論術』⁸にまで遡ることができる。ところで教育もまた、人間相互間で行われる行為であり、そこでは子どもが対象の解明のために自分の言語を使いこなし、論証と推論に役立て、互いに「意思疎通（Verständigung）」ができることが目指されている。この点において、レトリックと教育は重なり合うのである。「陶冶理論的に言えば、そのような理論的省察を背景にしたレトリックの論理が目的とするのは、世界と人間について異論のある解釈をめぐる対立の中で、意思疎通の機能的な構造を解明することである。その際に意思疎通は、弁論術としてのレト

リックの理論に方向づけられている」(LR22)。子どもはレトリックを習得することによって、ある事物や事柄をめぐる見解の相違を審議し、相互の「同意 (Zustimmung)」を得ることができるようになる。デアピングハウスの言う同意とは、互いに異なった見解を持つ者同士の「妥当性要求」の遂行の結果であり、状況の変化に応じて、あるいは時間的経過の中でその妥当性に疑念が生じることもあり得ると言う。それゆえここでの妥当性とは、絶対的な真理を意味するものではない。それは個人的な確実性を出発点とし、論証的意思疎通によって同意を得ることによって、維持されるだけのものにすぎない。「同意の問題は、純粋な妥当性理論の判断論理の問題であり、認識論的な真理問題ではない」(LR139)。このようにデアピングハウスは、妥当性の問題を論理的判断の問題に限定し、認識論的な真理問題と完全に区別している。この点については、後に詳しく検討することにする。

ところでデアピングハウスによれば、妥当性要求に従って同意を目指す論証的意思疎通は、自己と他者の見解の相違を際立たせるが、このことは言い換えれば、自己と他者、自己と社会との関係を反省し、見直すことでもある。それゆえ論証的意思疎通は「世界解釈」と同時に「自己解釈」でもあり、新たな「自己発見 (Selbsterfindung)」をもたらすものとされる。論証的意思疎通が、相手や状況が異なるごとに異なった妥当性要求を引き起こすのに応じて、自己と社会との関係もその都度異なった解釈が要求される。それゆえ自己発見とは、論証的意思疎通が明らかにする自己と他者の思考の違い (彼はウィトゲンシュタインの言葉を借りて、「言語ゲーム」の違いという表現を用いている)、より一般的に言えば自己と特定の社会との「差異 (Diffrenz)」の解明であり、同意とはこの差異を「統一 (Einheit)」することである。この統一を象徴する表現が、「自我 (Ich)」に他ならない。それゆえデアピングハウスは自我を、一種のイメージあるいは隠喩として特徴づけるのである。「自己発見としての (レトリック的な) 自我は、言語ゲームの共同体における論証的意思疎通の中で隠喩として、すなわち自我と社会の差異の統一として形態化される。自我は創造的能力の成果として、言語ゲームの共同体とその根底にある生の形式 (Lebensform) を反映している。差異のこのような統一は企てにすぎず、崩れやすく、仮説的なものである。それは言語ゲームの差異の統一であり、諸々の言語ゲームにおける自我の多様さの統一である」(LR185)。ここでは自我の意味が問われており、それは結局その語を使用する社会との関係で理解されるものでしかない。しかもこの関係は、それを使用する社会的状況に応じて多様に変化していく。このように考えれば、自我とは差異化していく諸々の社会的関係を暗示する隠喩となるのである。「つまり隠喩とは、概念的に限定して言えば、差異化されたものを解消することなしに統一することであり、差異化されたものは差異としてそのまま保たれている。隠喩は新しいものを作り出し、新たな関係を打ち立てるのであり、場合によっては自明的なものに対する混乱を通して、言語にないものを指し示すかもしれない。隠喩の構造は、差異の統一として記述され得るのである」(LR185)。デアピングハウスのこのような隠喩の解釈や、「統一」の意味については、後ほど再び取り上げることにしたい。

こうしてデアピングハウスは、レトリックによる論証的意思疎通が、他者との差異を通して新たな自己発見へと通じ、自我が隠喩として理解される点に、レトリックの陶冶理論的意義を見い出している。それと同時に彼は、論証的意思疎通が妥当性要求の遂行として同意を目指す点にも、次のような教育学的意義を見い出している。同意によって承認された知識は、妥当性を持ち「伝達 (Überlieferung)」されるにふさわしい知識となる。このような知識の妥当性の承認は、文化財の伝達としての教育の前提条件となる。論証的意思疎通という時間的経過の中で、言語ゲームの参加者によって知識が妥当なものとして承認されていくための条件を解明することが、教育学の課題となるのである。こうしてデアピングハウスは、教育学をヘーニスヴァルトの言葉を借りて、「妥当性理論」として捉えるのである。

このような教育学は、次世代に伝達する知識の妥当性だけでなく、知識を構成している教育学の諸理論の妥当性をも問題とする。レトリックの論証は、多様な教育学理論間での知識の妥当性を探っていくことを可能にする。「レトリックの理論はさらに、それが様々な知識の諸形式を移しかえ、結びつける状態にすることにより、学際性を可能にする。しかしこの移しかえが成功するのは、この知識の諸形式がその根拠を、言語ゲームの共同体によって共有された明証の中に持つ限りにおいてである」(LR198)。それではこの「明証」はどこに求められるのだろうか。デアピングハウスはそれを、「知識の美的性格 (Schönheit)」に求めている。彼によれば、レトリックによる知識の記述は感覚的なものや想像力と結びついており、その修辭的機能を介して美学へと接近する。美的なものの経験は、認識するものと認識されるものの関係の「本質的契機」となり、ここでは主体と客体の区分は相関的なものとなる。彼はこの関係を「知られたものに対する実存的関係 (existentielles Verhältnis)」と呼び、ここに知識の妥当性の契機を見いだしている (LR196)。

以上のことから、デアピングハウスは教育学の学問的性格について次のようにまとめている。「学問としての教育学は、レトリックとの結びつきの中で、陶冶理論と妥当性理論として理解される。このことは、ヘーニスヴァルトにならって、意思疎通概念の機能と重要性を解明することで明らかとなる。レトリックの論理の意味での陶冶概念は、自己発見者という構想で達成される。この自己発見者は、自己を自我と世界の差異の統一として、そして言語的遂行の隠喩として記述するのである。美と知識との連関の叙述は、知識の概念規定についての討議と、知識の諸形式の差異化についての討議の道を示すのである」

(LR200)。彼の教育学の特徴は、伝統的なレトリックの論証を妥当性の要求の遂行と見なし、この遂行に二つの教育学的意義を認めている点にある。ひとつは論証に参加する者の自我の形成であり、もうひとつは論証による同意によって維持される知識の妥当性である。自我の形成あるいは自己形成の概念は、起源的にはドイツ教育学の伝統的な陶冶概念まで遡ることができる。すでにフンボルトが言語を陶冶に必要な不可欠な手段と見なしたことから明らかなように、自己形成と言語は本来密接な関係にある。しかし、言語を通しての予定調和的な自己発展という見方は、デアピングハウスの陶冶論にはない。現代哲学や教育学において、自我や自己、主体概念が批判的な問い直しにさらされている状況の中

で⁹、デアピングハウスは自我の陶冶可能性の根拠を、レトリックの隠喩に置くのである。そしてまたレトリックの論証は、多様な教育学理論の中で、教育学の知識の妥当性についての意思疎通を可能にする手段となる。このように見てくれば、デアピングハウスの教育学は、レトリックを復権させることによって、現代における教育学の学問的性格を考える上で有効な見方を提供しているものとして、評価することができるだろう。しかし彼の主張に対しては、次のような疑問が生じることも否定できない。

第一に、論証が目指す同意について、彼が純粋な判断論理の問題として捉え、認識論的真理問題を考察の対象外としている点である。はたして、両者は区別して考察することができるのだろうか。彼のこのような態度が、知識の妥当性の基準を、判断論理に求めるべきか、それとも美的判断に求めるべきか、かえって曖昧なものにしているように思われる。

第二に、デアピングハウスが言う「隠喩的自我」ないし自己の捉え方への疑問である。デアピングハウスは、自己は論証的意思疎通を通して発見される言語ゲームの共同体との差異であり、自我という隠喩で統一的に理解されるものであると言う。それではこの統一は、どのようにして達成されるのだろうか。意思疎通を通して差異化が繰り返されれば、自我の分裂も起こりかねない。自我を考える際に差異化の側面だけでなく、それが使用される状況の変化や時間的経過にもかかわらず、不変のものとして維持される統一的側面を考えることが重要なのではないか。

これら二つの疑問について、以下それぞれ検討していくことにしよう。

II. 妥当性と真理

デアピングハウスが、論証が目指す同意の問題を、妥当性の判断論理の問題として捉え、認識論的な真理問題と区別している根拠としているのは、ハンス・リップスの解釈学的論理学の次の一節である。「妥当性は真理の存在様式に高められてはならず、このことによって妥当性が、あらゆる意味に対して空疎なものにされてはならない。真理はそれ自体で妥当するものではない。つまりあるものが、真理として妥当するということは、それに基準となる意味が与えられたことを認めるということを示しているにすぎない」(LR 141/UL17)¹⁰。ここでリップスが言いたいことは、真理は「それ自体で」妥当するものではなく、つまり絶対的な妥当性ではなく、あるものの意味との関連において「真なるもの」として妥当するということである。リップスにとって真理は、語の意味と結びついている。ある事物や事柄の意味がすでに確定している場合、われわれはそれを基準として真偽の判断や推論をすることができる。したがってあることが真であるということは、それが妥当な意味を持つということである。このように対象に基準となる意味を確定し、その意味を定式化していくことを、リップスは世界に対する人間の「事物 (Sache) 的關係」(UL 13) と呼ぶ。この定式化の最も極端な例が、数学の命題や定義である。

このような事物的関係を求めていくことが、妥当性の要求であるとデアピングハウスは言う。「妥当性が要求するのは、基準を与えるものとされる事物的関係の広大な関連であ

る。妥当性は、事物的関係を表現し反映している言語的諸関連から、切り離されえない」(LR138)。ある事物の意味が妥当なものであるかどうかは、その語を実際に使用していく中でしか判明しない。妥当なものであれば問題なく意思疎通が行われるが、そうでなければ、その意味は論証による同意を得なければならない。仮に同意を得たとしても、その語の意味が、別の機会に別の使用者によって同意を得られなければ、再び論証が必要になる。この同意で問題となるのは、語の意味がその時の使用者にとって適切であるかどうかであり、その意味の普遍妥当性や本質は問題とならない。このような理由で、デアリングハウスは、同意の問題から認識論的真理問題を区別するのである。

同意の問題から認識論的真理問題が除かれることによって、同意の基準は実際の論証の中で求められるものとなる。「実際の同意を唯一の妥当性の基準と定めることは、問題に思われるかもしれない。しかしながら真理を表す正当な同意を知り、あるいはそのような同意をそうでない同意から区別できるようなメタ規則がいかんして基礎づけられるのかということは、完成するものではない。唯一の妥当性の基準としての同意概念は、隔たりと疑わしさから生じるのである。この疑わしさの背景には、今日的視点から見ると誤りのある理論に対して、全く人間らしいことではあるが、明らかに疑わしい同意があったという確信がある。理念的同意と実際の同意の区別は、論証の遂行の外から見たメタ視点的な結果である」(LR139)。要するにデアリングハウスによれば、真理の普遍妥当性を目指す理念的同意を否定するものではないが、それと意味の確定を目指す実際の同意は論証において区別することはできないし、その必要もないということになる。なぜなら「疑わしさ」が妥当性の基準となりえるからである。

しかしながら、われわれが同意を求めて論証を遂行していく際に、そこには何らかの形で真理の普遍妥当性を追求していく態度が認められるのではないか。そうであれば、同意の問題から真理の認識問題を区別するという方策よりも、論証という意味の確定を目指すレトリックの思考形式に、真理の認識の問題がどのようにかかわっているのかを明確にしていくことの方がより実際的であるように思われる。実際、デアリングハウスは同意の根拠を、カントの美的判断に基づいた知識の美的性格に求めており、このような同意は彼の言う「理念的同意」に相当するものではないか。同意の問題には、認識論的考察が入って来ざるをえないのである。さらにデアリングハウスが、妥当性問題の根拠としてリップスの解釈学的論理学を引用しながらも、リップス独自の真理概念に言及していない点は不十分である。この点について、以下考察してみよう。

リップスにとって真理は語の意味と結びついているが、語の意味は本来多義的なものである。それゆえ論証が事物的な関係を解明し、語の意味の確定と定式化を目指すだけであるとすれば、語の本質である多義性は失われてしまうことになる。語の多義性の維持とその意味の確定という相対立する課題を解決するためには、伝統的論理学の論証とは異なる意思疎通の形式が必要とされる。この形式とは、「対話 (Gespräch)」である。「対話の関係性は、各人の語の原理が他者の語においていかにあるかという点にある。しかしある対話において、各人の語が多義性を持ち、事物に向けてと同様に、一般に応答に向けて話さ

れている限り、そしてその際対話が、次第に対話それ自体の中にはまり込んでいく限り、ここでは思考と意見の交換よりも、対話の当事者どちらにも本来属していないような見方が具体化されることになる」(UL33)。対話において語は多義性を保ち、その意味は語の使用される状況の中で確定されていく。対話が参加者の自由な応答によって生産的に展開していく場合、事物に対して参加者が当初理解していなかった新たな解釈（ものの見方）が可能となる。この時事物は「事物的関係」から「もの(Ding)への関係」へと移行し、語の意味は新たに「充足(Erfüllung)」され、真となるとリップスは主張する(UL17)。そしてこのような語の意味の充足は、人間の自己理解と深く結びついているのである。「ものはこれこれのものとして示される。このことで言い表されているのは、私は自分をもに即してまさにただ試すことができるだけなのであり、私はものから自分自身へともたらされるということである」(UL56)。このことをリップスは簡潔に、「実存(Existenz)が企図される」(UL56)と表現している。

リップスの解釈学的論理学から、次のことが明らかになる。ひとつは、デアピングハウスの言う「事物的関係」を目指す妥当性要求とは別に、リップスの言う「ものへの関係」を可能にする対話における真理というものが存在するということである。もうひとつは、人間が自己の存在についての深い自己理解に達することができるのは、生産的な対話を通してであるということである。リップスにおいては、伝統的論理学における命題の妥当性と、対話における真理とは厳密に区別されており、とりわけ後者は人間の認識と実存にかかわるものとして、彼の解釈学的論理学の中心問題となっている。それに対してデアピングハウスは、論証的意思疎通における同意問題から、認識論的な真理問題を切り離すことによって、レトリックの論証を事物的関係の追求に限定している。その目指す所が事物の意味の確定であるとするれば、レトリックの論証形式は、伝統的論理学の厳密に演繹的な推論形式に従わなければならない。これを彼は、同意の「判断論理」と呼んだのである。しかしレトリックの論証は、厳密に演繹的な推論形式とは言えない側面を持っている。次にこのことを考察してみよう。

Ⅲ. 説得推論と解釈の論理

デアピングハウスの言う論証とは、具体的にはアリストテレスの『弁論術』の「説得推論」を指している。説得推論とは、「或るいくつかの命題があり、それらが普遍的に、もしくはほとんどの場合に真であることから、他の命題をそれらから、それらとは別に、結論として導き出すこと」¹⁴である。例えば「ドリエウスは栄冠のかかった競技で勝利を得た」[結論]。彼はオリュンピアの競技で勝利を得たのだから[前提]という推論がこれに当たる。この場合、「オリュンピア競技は栄冠のかかった競技である」という命題を大前提として付け加える必要はない。なぜならこのような命題は、初めから広く一般に認められている内容であるから、弁論においてあえて言明されなくても、聴き手によって暗黙のうちに補足できるものと見なされるからである。

このように説得推論における命題が蓋然的なものであり、周知のものであるがゆえに弁

論の中で省略されることを、デアピングハウスは説得推論の「不完全さ」と「不確定さ」として特徴づけている。「このようなレトリック的論証の原則的に省略法的な特徴は、この論証の特徴のひとつである。この特徴はアリストテレスのレトリックについての熟考によって、明白である。基礎づけは常に不完全で、結局は不確定なものに留まる。そしてこの基礎づけが、原則的に言明されていないものに関係づけられている限り、それは不完全さと不確定さに留まらなければならない、いかなる場合も決して、最終的な基礎づけの論証にはならないのである。さらに言えばこの基礎づけは、懐疑的な思考に支えられている。ひとつは人間の可能性の評価についての懐疑であり、もうひとつは方法論的に、主要な前提へ広範に遡及していくことによって生じる懐疑である」(LR114)。説得推論は最終的な基礎づけではなく、人間の行為の可能性と、行為を導いている蓋然的な前提を問い続けていくものであるがゆえに、不完全で不確定なものに留まらざるをえない。デアピングハウスの言う論証的な意思疎通、あるいはレトリック的論証とは、問題となっている事柄について、意思疎通の妨げとなっている通常言明されることのない前提を明るみに出し、再度検証し続けていく過程に他ならない。このような過程の中で、事物的関係は見直され、新たな意味を得ることになる。このような過程は、リップスの言う対話に近いものであると言えよう。彼の解釈学的論理学が明らかにしたように、対話において語の意味は新たに確定され、双方にとって新たな意味理解が可能となる。対話は語の多義性を浮き彫りにし、語の意味や概念の修正を迫るのである。対話とはボルノウが言うように、まさに「解釈学的過程」¹²である。意思疎通の手段としてのレトリック的論証は、対話的思考を特徴とし、「率直さ」と「誠実さ」を特徴とする対話へと方向づけられていなければならない。それはいわば開かれた論証と呼ぶべきものであり、それに対して命題それ自体の真偽は問題にせず、その純粋な論理形式だけを問題にするような伝統的論理学での論証とは区別されるものである。

もはやわれわれは、デアピングハウスの言う意思疎通のためのレトリックの論理を、解釈の論理という観点から捉え直してもよいだろう。レトリックにおいて、アリストテレスの説得推論が重要な役割を持つのはもちろんであるが、説得推論の背景に解釈が存在している以上、解釈の論理がまず先行しなければならない。この課題（解釈学的論理学）は、ディルタイの直弟子であるゲオルグ・ミッシュや、前述したリップスによって展開されていった。リップスが語の意味理解を人間の実存との関係で捉えたのに対し、ミッシュは、アリストテレス以来の伝統的論理学を、ディルタイを継承する生の哲学の立場から考察することによって、伝統的論理学では決して考察の対象とはならなかった、生と論理との根本的な関係に迫ろうとする。

ミッシュによれば、伝統的論理学における定義は、類と種の関係に基づいている。すなわちより一般的で抽象的な類概念と、それに含まれるより具体的で個別的な種概念を組み合わせることによって、定義が可能となる。しかしわれわれが日常的に話す語がすべて、このような包含関係に含まれるわけではない。「それゆえ包含概念と結びついた論理学の古典的な定義の図式に対して、同じような要求を持って、概念規定の異なった方策が生じ

る。この方策が試みるのは、まさに唯一のもので、包含できないものではあるが、その意味において理解可能なものを思考し、解明することである。このことは、論理学上有益な大きな転換である。すなわち、古典的論理学の存在論の場所で、生から出発するという転換である。より一般的に言えば、単なる理論的態度とは区別される生の関係 (Lebensbezug) によって、われわれが対象と結びついている所ではどこでも、対象は有意味性 (Bedeutsamkeit) を持つのである」(AL577)¹³。

ミッシュが明らかにしたように、古典的論理学の定義は一面的なものでしかない。なぜならそれは、人間の思考における対象把握を狭く捉えすぎているからである。概念を類と種の包含関係、あるいは上位概念と下位概念という段階的な秩序関係で定義しようとすることは、結論に向けて全体から部分へ、あるいは一般から特殊へ直線的に進む推論形式に基づいている。しかしこのような包含関係や秩序関係には属さず、それが使用される状況や文脈全体、あるいは使用されてきた歴史との関係の中で、その意味が初めて理解されるような概念も存在する。ミッシュ自身が挙げている例に従えば、プラトンの対話篇で取り上げられているような「勇気 (Tapferkeit)」、「敬虔さ (Frömmigkeit)」、「思慮深さ (Besonnenheit)」等の概念がそうである。これらの概念の意味は、それを使用する個人の生活経験と結びつき、上位概念を規定することも困難なので、伝統的定義は困難であり、語の意味はそれを使用する人物との対話や、使用されてきた歴史や状況、あるいは文脈全体との関係の中でその都度解釈されなければならない。ここでは全体から部分、一般から特殊へ直線的に進む推論ではなく、全体と部分との循環関係がある。

以上のことからミッシュは、人間の思考における「論証性 (Diskursivität)」は、全体と部分との関係に基づいて、二つの対立する極に分かれるとしている (AL433)。ひとつは古典的論理学や自然科学の定義に代表されるような、明確な包含関係に基づく直線的推論であり、これをミッシュは「純粋に論証的な形式 (rein diskursive Form)」と呼んでいる。もうひとつは、全体と部分との循環によって理解可能となる形式であり、このような形式を「喚起的形式 (evozierende Form)」と呼んでいる。この形式の代表としてミッシュは、哲学や精神科学の術語、また詩的表現を挙げている。ただしこれら二つの形式は、あらかじめ明確に区分されるものではない。両者の間には段階的移行があり、論証的思考の対象に応じて、解釈を要求する喚起的形式を根底にして、意味を確定する純粋に論証的な形式の領域へと収れんしていくものと考えられる。

ミッシュの解釈学的論理学が、論証性を古典的論理学のそれよりも広く捉え、喚起的形式も論証性的一方の極であると主張したことは重要である。なぜならこの主張は、解釈学的過程を特徴とするレトリックの論証に、有益な見方を与えるからである。すなわち意思疎通の手段としてのレトリック的論証は対話へと開かれており、純粋に論証的な形式と喚起的形式の両極の間で展開すると考えられる。そこではミッシュの言葉で言えば、「思考可能性 (Gedankenmäßigkeit)」と「極めがたさ (Unergründlichkeit)」が結びついている (AL577)。それゆえレトリックの論証は完結することなく、常に未完成なものに留まらざるを得ない。とりわけ喚起的形式においては、そこで形成された概念(ミッシュは「解

積学的概念」と呼ぶ)は、常に「言明によって完全に止揚することはできないという意識」(AL572)が伴うものとされ、解釈を要求する。この解釈において、われわれが生(Leben)の極めがたさを意識せざるを得ない時、事物は「生の真理 (Lebenswahrheit)」として、その実在性を獲得するとしている。「そこでは真理と表現の真正さは一体である。この場合の真理は、純粹に論証的な形式化の場合とは違って、判断とその事物的な正当性に制限されるものではなく、生の真理である」(AL574)。レトリックの論証のこのような特徴は、アリストテレスのレトリック体系の説得推論だけでなく、他の技法にも新たな光をあてる。その技法とは修辞、とりわけ比喩である。

IV. 隱喩による意味連関の分節化と構造化

比喩をアリストテレスは、次のように定義している。「比喩とは、本来別のことをあらわす語を転用することをいう。すなわち類をあらわす語を、その類に属する種に転用すること、種をあらわす語を、別の種に転用すること、比例関係によって転用すること、のいずれかである」¹⁴。この定義から明らかなように、話し手が比喩を用いる場合、それが示唆する対象についてすでに類と種の包含関係が前提とされている。聴き手は比喩の解釈を通して、その背後にある類と種の間関係や比例関係を推論することになる。簡潔さを重視する弁論術において、なぜこのような回り道がとられるのだろうか。その理由は比喩が、それが示す事柄を「眼前彷彿とさせる」ような効果を与えるからである。「私の考えを示すなら、目に浮かぶように描き出すとは、表現を、事柄が生々と活動している形で再現するものとするのである」¹⁵。アリストテレスにおいては、比喩は詩的表現の技術としての役割を果たすとともに、弁論の技術としても聴き手を説得するのに効果的な技法であると見なされている。

ところでアリストテレスが定義した比喩は、現代の修辞学での一般的な分類によれば、類から種への転用は「提喩 (シネクドキ)」に、種から種および比例関係による転用は「隱喩 (メタファー)」に相当するものと考えられる¹⁶。提喩は類と種の包含関係に基づき、類を種で、あるいは種を類で表すことを特徴とする。例えば「教育」(類)で「学校教育」(種)を、「英語」(種)で「外国語」(類)を表す。この包含関係は、語の意味の類似性に基づくあるカテゴリーの形成であり、そのカテゴリーの「プロトタイプ (代表例)」を選別する機能を持つ。もうひとつの隱喩は、意味的な類似性に基づいて「あるものを別のものに見立てる」技法である。例えば子どもを「白紙」に見立てたり、「植物」に見立てたりする例がこれにあたる。隱喩の本質は、一般に意味的に異なるカテゴリーに属するもの(子ども→人間、白紙→筆記用具、植物→自然)の間に意味的類似性(「製作に用いる素材」、「有機的成長」など)を発見し、両者の間に新しい関係を結びつけることにある。このことは論理的に言えば、既存の意味的包含関係を越境し、新たな包含関係を形成することであり、解釈学的に言えば全体と部分との連関に基づいて、新たに意味連関を分節化し、その構造を把握することである。

われわれが世界を認識する際、体験した事物や出来事を結びつけ、有意味なものとして

理解しようとすることは自然な態度であるが、提喩と隠喩はこの認識作用を意識的に気づかせる修辭的技法なのである。提喩は意味の包含関係に気づかせる。この関係は世界の有意義化に貢献し、類と種の関係によって意味を確定し、それに基づく論理的思考を可能にする。しかしリップスが指摘したように、意味は本来多義的であり、世界は多様な解釈に満ちている。われわれが一面的に確定した世界理解から抜け出すためには、新たな意味連関を形成し、構造化し直す隠喩が必要とされるのではないか。隠喩はリクールが指摘したように¹⁷、「世界の再記述」であり再発見という機能を持つ。われわれの凝り固まった世界観に、隠喩は新しい世界の見方を可能にしてくれるのである。それはミッシュの言う「生の極めがたさ」の体験であると言ってよい。

デアピングハウスは、メタファーを「差異化されたものを解消することなく統一する」ものとして特徴づけているが、彼の言う「差異化」という表現は、ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論に基づいている。しかしウイトゲンシュタイン自身は、個々の言語ゲームにはある「類似性」が見られることを指摘しているだけで¹⁸、言語ゲームの差異の統一について語っているわけではない。デアピングハウスは、言語ゲームの類似性において、差異と同時に「共通性」も認識されるとしているが（LR191）、それならば隠喩がいかにして、差異と共通性を結びつけるのかを説明しなければならないだろう。この問題は、隠喩が前提にしている意味の論理構造を抜きにしては解決されない。隠喩の機能は、意味連関の分節化と構造化である。それではこのような機能を持つ隠喩は、自我の形成にどのように作用するのだろうか。このことを、デイルタイの自我概念に即して考察してみよう。

V. 全体性への帰属としての自己

デイルタイによれば、自我とは人間の生における「生の関係」に基づいて成立し、かつ変化するものである。「さまざまな営みが生じる不変の根底には、自我の生の関係を含んでいないものはない。ここではすべてのものが自我に対してある位置を取っているのであり、同様に自我の状態も自我に対する事物と人間との関係に従って常に変化する」（VII 131）¹⁹。自我は世界との関係において、常に不可分で相対的なものとしてあり、自己と事物、自己と他者との区分とその関係は、この生の関係の記述において初めて明確になる。生の関係の記述は、対象の「意味」や「価値」、「目的」といったデイルタイの言う「生の実在的カテゴリー（reale Kategorie）」によって行われるが、この記述によって自己と生の関係は多様に分節化されていく。しかしこの分節化は、時間的経過の中で拡散していくようなものではなく、互いに関連づけられながらひとつの「内的な諸連関」として統一され、発展していくものとされる。生の関係の記述によって得られるこのような「内的な諸連関」を、デイルタイは「獲得連関（erworbener Zusammenhang）」と呼び、この連関が心的なものとして、判断と理論的究明を行う「論理的主体」となるとしている（VII 80）。

このように主体とはデイルタイにとって、生の関係の記述を通して獲得される統一的な連関なのであり、この統一が可能なのは、生の関係が「意味」によって「全体と部分」の関係として理解されるからである。「意味とは、それを捉える主体の全体性との連関であ

ることに注意しておきたい。[中略] 意味とはまさにひとつの全体に属していることに他ならず、そしてこの全体において、全体が有機的あるいは心的なものとして、いかにして実在性を持つことができるかという生の謎が取り除かれるのである」(Ⅶ230)。このように主体とは、生の意味理解に基づき、全体と部分との関係を通して、自己が生に関連全体へと属していることが把握される時初めて、実在化されてくるものである。それゆえディルタイの言う自我とは、自己が生に関連全体へと帰属していることの表現に他ならない。

しかしここで新たな問題が生じる。自我が獲得連関の表現であるとしても、この獲得連関は新たな体験に基づいて絶えず変化する。新しい体験は、それ以前の体験の諸連関の中に組み込まれ、新たな全体を形成していく。このような変化にもかかわらず、獲得連関は「自我」という表現の下に、統一性を保っている。このような「変化する中での連関の継続と連続性」(Ⅶ244)は、どのようにして保たれるのであろうか。

ディルタイ自身は獲得連関のこのような性質を、生の「自己性 (Selbigkeit)」という実在的カテゴリーで記述しようとする。「生の経過が自己性の意識によって、連続的に結びつけられるように、生のあらゆる瞬間はこの自己性のカテゴリーにその基礎を置く。分離しているものは、連続性へと結びつけられる。瞬間ごとに生き生きとしていた子ども時代の小さな姿から、自らよって立つ確固とした内面性を持って、世界に対して主張する大人までの記憶の糸をたどることによって、われわれは作用と反作用の経過を、自ら形態化するもの、そして内側から何らかの仕方で規定されつつ発展するものへと結びつけるのである。この自己に作用する外的な諸経過は、自己に対してひとつの作用価値を持つ。この自己の個々の状態と、自己への諸々の作用は、生の経過とその中で形態化されたものとの関係において、ひとつの意味を持つ。個人が自己の生の経過について、このように熟慮したものの文学的な表現が、自伝である」(Ⅶ247)。ここでわれわれは「自己性」のカテゴリーの成立が、個人的な「生の関係」とともに、「生の経過」すなわち歴史性にも基づいていることに気づく。個人の生活の中で、事物や他者は価値あるものとして個人に働きかけ、個人の状態に変化をもたらす。この時個人は、自己のそれまでの生の経過を想起しながら、それらに働き返す。このような行為によって、個人のそれまでの生の経過は、ひとつの有意味な連関 (人生) として新たに形態化されるわけである。このような行為は、いわば一種の「自己省察 (Selbstbesinnung)」であり、この自己省察の典型的な表現形式として、ディルタイは自伝を挙げるのである。

自伝はディルタイにとって、生の理解のための「最高で最も有効な形式」(Ⅶ199)であるとされる。これまでの考察の関連で言えば、自己が生に関連全体へと帰属しているという実在感をもって最もよく把握されるのは、自伝という表現形式、つまり自己についての物語の理解を通してであるということになる。ディルタイ自身は明確に言及してはいないが、生の経過の中で獲得された連関を、ひとつの有意味な連関として統一する手法として、物語が有効な形式であることは認められてよいだろう。彼の自我論とそれに基づく歴史理解は、現代の物語論 (ナラトロジー) の観点から見直されてよい²⁰。主体は自分が自分について語る物語において、最も良く自己理解できるのである。

そうだとすれば、自己の物語をいかに語るかということが重要になる。過去の歴史的事実を再構成し、新たな筋立てを考えるためには想像力が要求され、効果的に表現していくための技法を必要とする。ここに意味連関を分節化し、構造化していく機能を持つ隠喩の意義がある。歴史的出来事は、語り手の想像力によって新たな文脈で捉え直され、それが生き生きとした表現によって語られるほど、強い説得力を持つと言える。人間は物語という形式で過去の出来事に関連づけることによって、自己の实在性の確証を得ることと、出来事の別の関連づけの可能性を想像して別の物語を語って行くことを繰り返す。このような現実の再記述と再発見、そして自己の物語の再創造という一連の行為に隠喩はかかわるのである。

おわりに

デアピングハウスは教育学の学問的性格を、レトリックの論証により同意を目指す妥当性理論と、子どもの自己発見としての陶冶理論として捉えていた。彼のこのような教育学の構想に対して、われわれは二つの疑問点から出発し、この疑問を解明すべく考察を行ってきた。考察を終えるにあたって、今やわれわれはこの疑問に対して、以下のように答えることができる。

第一に、レトリックの論証の妥当性は、認識論的観点を抜きにして考えることはできないということである。レトリックの論証形式である説得推論は、解釈を前提にしている。それゆえレトリックの論理は解釈の論理に基づいており、リップスの言うように、終わりのない対話へと開かれていなければならない。その思考は、全体と部分との意味連関から、一方では対象の意味を確定する方向へと向かい、他方ではこうして獲得された連関を再び分節化する方向へと向かう。このような意味連関の構造化と分節化の過程（それは人間の実存にもかかわる行為である）の中から、精神科学特有の真理概念や思考形式が生じてくるのである。レトリックの技法や規則は、人間の認識のこのような作用を意識的に気づかせるものである。

第二に、デアピングハウスの言う隠喩の「差異の統一」は、意味の多義性に基づく新たな包含関係の形成において可能となる。隠喩は全体と部分との解釈学的循環によって、生の連関を分節化し、新たな意味連関を構造化していく機能を持つ。「自我」は、このような生の連関の構造の隠喩的表現である。この語によって表現されているのは、自己が生連関全体に属しているということであり、このことを理解することによって初めて、主体としての实在感を獲得することができる。こうして獲得された生の連関（主体）は、物語という形式をとって最もよく表現され、理解される。隠喩はこの自己の物語の再創造に役立つのである。

レトリックの技法や規則は、解釈学的に言えば「表現の普遍性」を求め、理解の「共通性 (Gemeinsamkeit)」(デイルタイ) を自覚させる技術であると言える。このようなことから、教育学を含む精神諸科学の言説を、レトリックの観点から分析することにより、その「客観性」の根拠となっている論拠や、その領域特有の概念や思考形式を見つけ出すこ

とも、ある程度可能ではないかと思われる。しかしレトリックの領域は広大であり、その体系や分類の煩雑さが、過去レトリックの衰退を招いたことも事実である。歴史的に見てもレトリックは、解釈学と一体となって発展してきた。レトリックと解釈学は、ガーダマーが指摘しているように²¹、人間本来の話す能力と理解する能力に基づいており、これらは日常生活の中で、意思疎通を目的として常に自然に行われているものである。レトリックと解釈学は本来、相互に「浸透しあい」、「交差しあって」いると言える。そうであればレトリックの論理は、解釈の論理から見直され、逆に解釈の論理は、レトリック的表現へともたらされなければならないだろう。先行するのは人間の自然で豊かな言語活動であり、人間の認識において、体験されたものの意味理解からどのようにして論証的思考が展開されて、レトリックの諸形式へと結びついていくのか、またそれら諸形式が、生の意味連関の構造化と分節化にどのような効果を与えるのかが、相互に明らかにされなければならない。換言すれば、レトリックはディルタイが主張した精神科学の根幹である「体験・表現・理解」²²の連関の中に位置づけられることによって初めて、精神科学の基礎づけに役立つものとなるのではないだろうか。

註

- 1 レトリックと教育の歴史については、次を参照。Helmer,K./Dörpinghaus,A. : Rhetorik. In : Benner,D./Oelkers,J.(Hrsg.) : Historisches Wörterbuch der Pädagogik, Weinheim/Basel 2004, S. 824-833.
- 2 Rodi,F. : Zur Metaphorik der Aneignung. In : Bildung und Erziehung, 20Jg. (1967), S. 425-438. Bollnow,O.F. : Sprache und Erziehung, Stuttgart 1969, S. 134-137. Haan,G.D. : Über Metaphern im pädagogischen Denken. In : Zeitschrift für Pädagogik, 27. Beiheft (1991), S. 361-375. Peyer,A./Künzli,R. : Metaphern in der Didaktik. In : Zeitschrift für Pädagogik, 45Jg.(1999), S. 177-194.
- 3 ヘルマーとデアピングハウスの編集によって、現在まで次の四巻が出版されている。Bd. 1 : Zur Theorie der Argumentation in der Pädagogik (1999), Bd. 2 : Rhetorik-Argumentation-Geltung (2002), Bd. 3 : Topik und Argumentation (2004), Bd. 4 : Ethos-Bildung-Argumentation (2006).
- 4 Wigger,L. : Argumentationsanalyse als Forschungsmethode und als Bildung In : Koch,L.(Hrsg.) : Pädagogik und Rhetorik, Würzburg 2004, S. 181.
- 5 例えば次の文献を参照。König,E : Bilanz der Theorieentwicklung in der Erziehungswissenschaft. In : Zeitschrift für Pädagogik, 36Jg.(1990), S. 919-936.
- 6 中井孝章『学校教育の言語論的転回』西田書店、2005年。鈴木晶子編『これは教育学ではない』冬弓舎、2006年。
- 7 Dörpinghaus,A. : Logik der Rhetorik,Würzburg 2002. 以下この書の題名をLRと略して、引用頁をアラビア数字で本文中に示す。
- 8 アリストテレス、戸塚七郎訳『弁論術』岩波文庫、2003年、31頁。

- 9 例えば次の文献を参照。Stroß,A.M. : Ich-Identität—eine pädagogische Fiktion der Moderne? In : Hoffmann,D.,Langewand,A.,Niemeyer,C. (Hrsg.) : Begründungsformen der Pädagogik in der ›Moderne‹ ,Weinheim 1992, S. 261-278.
- 10 Lipps,H. : Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik, Frankfurt a.M. 1976, S. 17. 以下この書の題名を UL と略して、引用頁をアラビア数字で示す。
- 11 アリストテレス、前掲書、35頁。
- 12 Bollnow,O.F. : Das Doppelgesicht der Wahrheit, Stuttgart 1975, S. 70.
- 13 Misch,G. : Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lsbens, Freiburg/München 1994, S. 577. 以下この書の題名を AL と略して、引用頁をアラビア数字で本文中に示す。
- 14 松本仁助・岡道男訳『アリストテレス 詩学・ホラーティウス 詩論』岩波文庫、2003年、79頁。
- 15 アリストテレス『弁論術』、352頁。
- 16 比喩の分類については、次の文献を参考にした。佐藤信夫『レトリック感覚』講談社学術文庫、1992年。野内良三『レトリック入門』世界思想社、2002年。佐々木健一監修『レトリック事典』大修館書店、2006年。
- 17 ポール・リクール、久米博訳『生きた隠喩』岩波書店、1998年、22頁。
- 18 ウイトゲンシュタイン、藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店（『ウイトゲンシュタイン全集第八巻』）、2002年、69頁以下。
- 19 Dilthey,W. : Gesammelte Schriften Bd. VII, Göttingen 1992, S. 131. 以下デイルタイ全集からの引用は巻数をローマ数字で、引用頁をアラビア数字で本文中に示す。
- 20 Owensby,J. : Dilthey and the narrative of history, Ithaca/London1994.
- 21 Gadamer,H.-G. : Rhetorik und Hermeneutik (1976). In : Gadamer : Gesammelte Werke Bd. 2, Tübingen 1993, S. 280.
- 22 Dilthey : Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften (1910). In : Dilthey : Gesammelte Schriften Bd. VII, Göttingen, 8. Auflage 1992, S. 86-88.

Über die Rehabilitation der Rhetorik in der Pädagogik

–Begründung der Pädagogik mittels der rhetorischen Argumentation–

Masaya SETOGUCHI

Der vorliegende Aufsatz untersucht die Möglichkeit der rhetorischen Begründung der Pädagogik, indem er die pädagogische Theorie von A. Dörpinghaus unter dem Gesichtspunkt der hermeneutischen Logik kritisiert.

Dörpinghaus versucht die Rhetorik in der Pädagogik zu rehabilitieren. Er behauptet, dass die Pädagogik als Wissenschaft auf der rhetorischen Argumentation beruhe. Die rhetorische Argumentation bei der Verständigung sei der Vollzug des Geltungsanspruchs des Wissens, und sie zielle auf die Zustimmung der Teilnehmer. Damit führe sie zur Selbsterfindung der Teilnehmer. Also bezeichnet er die wissenschaftliche Pädagogik als Geltungstheorie und Bildungstheorie.

Dieser pädagogische Plan von Dörpinghaus birgt zwei Probleme, die nicht gelöst werden. Erstens beschränkt er das Zustimmungsproblem auf eine rein geltungstheoretische Urteilslogik, und er schließt eine epistemologische Wahrheitstheorie vom Zustimmungspblom aus. Zweitens, wenn „Ich“ als ein metaphorischer Ausdruck der Einheit in der Differenz beschrieben werden kann, dann entsteht die Frage vor, wie diese Einheit gebildet werden kann.

Für diese Probleme gibt die hermeneutische Logik einen Anhaltspunkt zur Lösung. Denn sie analysiert einen Prozeß des diskursiven Denkens, das sich vom Lebensverstehen zum rhetorischen Denkmuster gestaltet. Die rhetorische Argumentation unter dem Gesichtspunkt der hermeneutischen Logik entwickelt sich zwischen gegensätzlichen Richtungen. Die eine orientiert sich an einer Strukturierung, die Bedeutung in Beziehung der Teile zum Ganzen als gültig definiert. Dagegen orientiert die andere sich an der Artikulierung dieses Strukturzusammenhangs der Bedeutung. Diese Artikulierung gibt einen Weg zur Wahrheit im existentiellen Sinne. Die Metapher kann die Wechselwirkung zwischen Strukturierung und Artikulierung des Bedeutungszusammenhangs fördern.